

令和元年度横浜みなとみらいホール指定管理者選定評価委員会 会議録

- 1 日 時 令和元年10月16日（水） 15時40分～17時30分
- 2 場 所 横浜みなとみらいホール レセプションルーム
- 3 出席者 石田 麻子 委員、伊藤 裕夫 委員、田中 操 委員、丸山 宏 委員、箕口 一美 委員
- 4 傍聴者 なし
- 5 議事内容

議題	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員長の選出 3 定足数の確認について 4 委員会の公開・非公開について 5 審議事項：平成30年度業務評価 <ol style="list-style-type: none"> (1) 評価関係資料について（事業報告及び自己評価・行政評価の説明） (2) 指定管理者へのヒアリング
委員 意見 等	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員長の選出 「横浜みなとみらいホール指定管理者選定評価委員会運営要綱」第6条第1項に基づき、委員の互選により丸山委員を委員長に選任した。 3 定足数の確認 委員数5名のうち5名の出席により定数を充足し、会議の成立を確認した。 4 本委員会の公開・非公開について 横浜市の保有する情報の公開に関する条例 第31条及び横浜みなとみらいホール指定管理者選定評価委員会運営要綱 第9条に基づき、公開とした。 5 審議事項：平成30年度業務評価について <ol style="list-style-type: none"> (1) 評価関係資料について（事業報告及び自己評価・行政評価の説明） 指定管理者による事業報告及び自己評価の説明、横浜市より行政評価の説明を行った。 (2) 指定管理者へのヒアリング （以下「・」＝委員、「→（委）」＝委員、「→」＝指定管理者、「→（市）」＝横浜市、「→（財団）」＝公益財団法人横浜市芸術文化振興財団） 委員から指定管理者に対する質疑応答及び評価内容の説明を行った。 <p>〈主な質疑応答〉</p> <p>「1 経営」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・財団所管の他施設との連携の具体的な成果をお聞きしたい。例えば横浜美術館でのコンサートの反応はどうだったか、お客様はどのような評価をしているか。

→展覧会と連携したコンサートにより相互にお客様が行き来する成果があった。展覧会の学芸員、音楽のプロデューサーとして連携することで、単に美術館でコンサートをするというだけではなく、展覧会を理解した上でどういった親和性を持ってコンサートを行えるかということの高いレベルで協議・相談できる場ができたことも成果であり、現在も継続している。

お客様の反応は、一つは、美術の空間という特別な空間で音楽を楽しむことへの高い評価があった。また、コンサートを見ることで展覧会を鑑賞してとても良かったというアンケートをたくさんいただくようになった。

- ・美術館に来たお客様が音楽に偶然触れるケースと、横浜みなとみらいホールの観客が美術館という場所で音楽を聞くことによって違った喜びを感じようというケースがあるが、今後どのような形で考えていくのか。また、財団管轄以外の市の他の文化施設との連携は今後考えていくのか。

→展覧会に来たお客様が偶然コンサートに触れられる機会と、両施設のお客様が相互に行き来するコンサートも必ず一つの展覧会で用意している。現在は、当財団運営の施設との連携を進めているが、その他の施設とも連携を進めていく準備をしている。2021年度から長期休館もあり、連携はそういった環境の中でも必然的に進めていかなければならない。

- ・30年度の市民ギャラリーあざみ野での取組（コンサート）が、区にある文化施設との連携、つまり草の根の観客の掘り起こしにつながっていくのではないかと。大規模改修の際のアウトリーチ的な活動にもつながるため、成果を聞きたい。

→内陸にあるあざみ野で行う成果として、主に居住者の方々が来てくださることによる横浜みなとみらいホールのアピール。もう一つの成果は、普段はギャラリーで行われていないコンサートに来てくださることで、街のにぎわいづくりや施設の活性化にもつながっていく。休館期間中は、18区の色々な所でアウトリーチをしていきたい。

- ・財団が運営している区の文化施設の企画や、アウトリーチ的な、横浜みなとみらいホールに来ている演奏家ないしは育てた演奏家や企画。財団として全体を見て、それぞれのホールや美術館、区の施設の特性というものを把握し、企画を持っていく先を考える機能、それを専らにしているような機能は持っているか。

この人数でこのバラエティーのものを毎年全てやっていくことのほうが総花的になって、一つ一つの取組の掘り下げがしにくいのではないかと。例えば美術館でのコンサートが以前より少ない（以前は3か月に1回程度）。美術館で音楽を聴くことに満足している人達を横浜みなとみらいホールへ吸引する力があると思うが、頻度が少なくなってしまっている。

選択と集中と言いながらこれだけのことをやっている、なかなか集中できていない。例えば今年はホールでの演奏会に集中し、今年は連携や提携等啓発に力を入れるといった、4年、3年計画で実施する。3年目の成果の結果として、横浜みなとみらいホールとして選択と集中を行い、啓発事業はここに注力する。中身を充実させるのはこういう形でいく。パイプオルガンを推すといった、そういう選択がなされていって横浜みなとみらいホールらしいメニューになっていくという考え方はできないか。

→現在、各館が指定管理という制度の中でそれぞれの一定期間の計画を立てて運営し、それぞれの館の専門性を高める意識で取り組んでいる。

財団としては、チーフプロデューサー制を進めていこうと、舞台芸術、音楽、古典芸

能のそれぞれの専門家が育っていく中で、音楽のチーフプロデューサーが各館をまたいでユニークな事業を企画して引っ張っていくようなことが理想として描けているのではと思うが、まだ時間が必要。

2つ目は、横浜みなとみらいホールは指定管理期間が10年だが、他の館は、その期間がずれているため、横浜みなとみらいホールが2年後に事業を花開くように計画を立てる時、相手方が指定管理の狭間の時期になると、進め方が悩ましい。財団以外の施設も含め、実施できそうなところを探してやっていく。その辺の課題もどのように解決していくか考えながらやっていきたい。

→(財団)休館期間に、他の施設でどのような事業を行うか考えなければならず、外の施設とどのようにつながっていくか考えるいい機会だと考えている。財団も参加し、10区民文化センターと定期的に会合等意見交換を持っており、それらをきっかけに今後の事業展開を図っていくというのはある。

横浜市は、トリエンナーレと音祭り「DANCE DANCE DANCE」で3年に一度ずつ回しているため、そのタイミングで、音祭りのときはホールで主に事業展開する、それ以外の年はアウトリーチ等の外に出ていくような事業を主体的に行っていくというような、メリハリのきかせ方は可能と考えている。

・30年度は助成金がとれなかったが、予算時に事業内容を、全て計画を立てるということか。

→そのとおり。

・助成金がなくなった場合に、経費削減をしているが、事業を行えば経費は必要である。どこを削るのか。

→予算には助成金を申請した満額を計上しているため、必然的に事業費も満額で行える事業を盛り込んで経費を計上している。どうしても必要な経費はあるため、その部分は赤字となる。その他、事業の価値を高めるために追加実施する取組は見直しをして、やり方を変える、取りやめるというような形で事業を圧縮せざるを得ない状態である。

・助成金の獲得にあたって、情報が不足したということなのか。

→その部分が大きいと考えている。今年は、先方へのヒアリングも含めて、どういう点を改善すべきかという対策を練りながら、来年度の助成金の申請に備えたい。情報収集とその分析・対策が十分ではなかったと考えている。

・専門性を発揮できる組織体制の具体例をお聞きたい。

→公共ホールに求められる価値を提供する事業企画部門に加え、満足度の高い利用者・来場者へのサービスということも重要であり、具体的にはレセプションのレベルの向上が挙げられる。

貸館は、市民の方の実演の希望をかなえる重要な部分であるため、自主企画事業に必要な日数とバランスをとりながら、市民の方に極力御利用できるようにしていきたいが、都合によりキャンセルになる部分もある。施設を有効に活用するためにその部分の利用をどう埋めるかは経験や知識、技量が物を言うところで、専門的に力を発揮していける人材育成をしたい。収支の苦しい時に、施設の利用料を高めていく努力が重要となる。自主企画事業のレベルを上げていくプロデューサーの専門能力の向上はもちろん、各セクションでお客様にかかわる部分の質を高めていくことを意識しながら、各職員の配置、技量を高めていく努力を進めていこうと考えている。

- ・専門性を高めていくことと予算の問題等、大きく2つの考え方がある。1つは、専門性を持つ人を、横浜みなとみらいホールとして雇用するか、財団として雇用するかという考え方。財団は指定管理者という形で市の施設を複数持っており、本部もある。ファンディングや社会的包摂の分野で、個々のホール、施設でそうした人材を抱えていくことはきついのではないか。むしろ本部機構の中でそういう人材をきちんと抱えて組み立て、プロパー職員として雇用も安定して専念できる状況になっていくと思う。財団という本部機構をうまく活用しながらの雇用の問題を組織の中で考えていくことが良いと思うがいかがか。

雇用だけでそのような能力を全て満たすことが不可能になってくると、外部のNPO等専門的な分野で活動している団体とのネットワークづくりが2番目のポイントになってくる。

内部化する部分と、一種のアウトソーシング、外部との連携のめり張りをつけていかなければ経営的には難しいのではと思うが、将来的なビジョンがあればお聞かせ願いたい。

→財団全体については、横浜みなとみらいホールの立場で答えられることではないが、これまでの経験では、事業協賛は現金をお寄せいただくことよりも、その事業の趣旨に賛同していただき、企業で対応できる協力を申し出ていただくケースが多く、各館の事業に関わるプロデューサーがその調整をしているケースが多い。

一方で、用途を特定しない形で広く集めることも考える必要があり、そのような部分の専門的な人材、知識が必要。本部でそういう機能を持つことを今後検討していく必要があるのではないか。

2点目のアウトソーシング的な部分は、全て自分達でノウハウを積んで独自で何かできるということは不可能であり、分野が狭まってしまうこともある。例えば、障がい者の方に、より文化芸術を楽しんでいただく活動の際、それぞれの分野に専門として携わっているNPOの方などがいらっしゃる。音を楽しむことに関して、これから我々が研究してやっていかなければいけないが、力をかりながらネットワークをつかっていかなければいけないと考えている。

「2 事業」について

- ・オーケストラの演奏会で入場者数が目標値に達していないという点が資料から読み取れないが、その点について伺いたい。

→(市)入場者数の合計のみ記載をしており、有料入場者数は記載をしていない。

- ・承知した。オーケストラの事業の部分は、これを横浜みなとみらいホールでやるべきなのか、外に対してどうアピールできているかということがとても大きなポイントになる。「なぜこれなのか」を、もっと説明できるようにということが常に問われ、同じことをやっても言葉の説明で差が出る。オーケストラ事業を横浜みなとみらいホールで行う意味はものすごくあると思う。それをどのように外に説明していくか、市民、国、市に対してもこれを行う意味というのをどう考えていくのか、我々も含め、一緒に考えていけたらと思う。

- ・横浜みなとみらいホールに限らず、関東圏の幾つかのホール等々は、オーソドックスなクラシックの演奏会が全て苦戦している。以前から言われているが、現在、特に若者を中心にクラシック離れが進んでいる。何らかの形で対応していかないと、ホールの将来、オーケストラも厳しいのではないか。

そういう中で、子供は未来に対して大きな役割は担うが、子供だと余りにも遠過ぎる。

中高生、特にブラスバンド等をやっているような人たちは、自分たちの発表は熱心だが、聞くほうに回るといことが弱いと思う。

演劇やダンスなども見に行くことに不熱心というのが典型的あり、今後、何か対策が必要である。

チケットが高額という問題もあるが、クラシックのファン層をもう少し厚くしていくために、5年、10年ぐらいの計画をぜひ考えてほしい。10年間の指定管理で政策協働型の指定管理方式をとっているというのは、そのようなロングレンジの戦略が求められるのではないか。

→まず何らかの形で、子どもだけではなく、ホールに来てもらう仕掛けを考えていこうというのが一つある。「みなとみらい Super Big Band」は子どもの育成事業だが、発表会等には必ずご家族の人がたくさん来てくださる。家族が演奏しなかったら来てくれなかった可能性があり、そのような方達が来てくれるところから始める必要があると考え、重点的に取り組んでいる。

もう一つは、自分は演奏しているが余りコンサートに行かない方々に、中高生も含めて聴きに来てもらう機会を設ける。今年度の取組で、チェコフィルでは通常 19,000 円の席が今回は 9,000 円という値段設定にし「席はお任せいただきます」という形でアプローチすると、それなりの数の申し込みがあった。そういう効果も見え始めてきており、今、両面から取り組んでいる。

・低料金・無料コンサートはかなり増えている。知ってもらうための広告のような形で、今やっているということか。

→その面もある。今年のように「横浜音祭り」があると、たくさんの市民の方々が参加する事業、聴きに来るものも無料となって数が増えるが、基本的には「オルガン 1 ドルコンサート」や低料金の 500 円、1000 円の公演は、一つは「ホールのある街」横浜みなとみらいホールを知ってもらうために行っているというのが大きな柱である。

→(委) それだけ続けると、スタンスの長い広告だけではなく、参加して来てもらってお金を払ってもらうというものを展開しようとしているとのことだが、それをどう考えるか。公演によっては、サラリーマンの方が昼休みに単に時間を過ごす様子も見受けられ、少し趣旨が違っているのではないか。公演の内容たるものが本当に来てもらうためのものであってほしいと思う。時間的にちょうどお昼休みぐらいだと思うが。

→「オルガン 1 ドルコンサート」は、昔は、お昼にもっと近隣の方々が来てくださっていた。現在は、日中お時間のある方々や、ご高齢の方が多い。逆に、我々は近隣の就労者の方々にもっと来てほしいと、オフィスにご案内をしている。横浜みなとみらいホールに来たことのない人たちにまず来てもらい、チラシ等でホールが何をやっているか知ってもらうことは大事。夜のイベントを少し増やしつつ、レセプションルームを使うなど、様々な仕掛けで近隣の就労者の方々に来てもらう事業をしている。

→(委) そうでないと、同じ人ばかりがホールに来ることになってしまう。

→興味はいろんなものにあると思うので、美術館のコンサートも、近隣の方々も含めて幅広い人たちがいろんなものにアクセスして横浜みなとみらいホールを知ってもらうようにするというスタンスで事業を組み立てている。

・興行モデルと考えるとクラシック音楽は勝負にならなくなっている。

チケットの高額が理由と思うが、海外のロックグループの地方公演が 25,000 円で、関心のない人は頼まれても行かないと思うが、翻って考えると 1,000 円でも 500 円でも無

料でも頼まれても行かないというジャンルにクラシック音楽が入っている世代がいる。今、高額のチケットを払えている人たちは、間もなくいらっしやなくなるはずだ。クラシック音楽を興行という枠組みで考えないで行う、クラシック音楽専用ホールとしてどうするかというところを開き直って考えなければいけない。今は9,000円にすればまだ来る人があるかもしれないが、地道に「オルガン1ドルコンサート」等に関心を持ってくれた人が、時間的な余裕ができて初めて来たという風に、横浜みなとみらいホールが20年かけて育てているかもしれず、これはリサーチできないことだと思う。興行モデルで考えない、でも質の高いと思われるコンサートを行うというところのブレークスルーはどこにあるのだろうか。個人的な見解でもいいのでお答えいただきたい。

→横浜みなとみらいホールは、専門施設、かつ市の施設で2,000人の施設という中での使命があって、第1期の指定管理者の時代から、音楽は限られた人だけのものではない、いろんな人が享受するものだという考えから、全方向に向けて事業をやってきている。当初は総花過ぎる、個性がないと批判されたが、その姿勢は変わらず市のホールとして今も続けてきている。最近では社会包摂や共生社会ということで、総花的な誰もが楽しめるホールが評価されつつあるが、その中で、コアな人たちに対する公演もやはり必要である。

今年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団が川崎にも来るが、あつという間に売り切れ、その3公演をセットで買うために会員になった方などもいると聞く。それだけコアのファンはいらっしやるが、他の海外オーケストラとなると非常に厳しい状況で、事業費を投入しないと絶対ペイできない。

海外オーケストラの芸術性の高い公演を楽しむお客さんも横浜みなとみらいホールにはいるので、可能な限りで開催する必要がある。ただし、以前と比べて、お客様が高齢になってきたこともあり、高い料金で一つの公演を楽しむよりも、安い料金でたくさん楽しみたいという人が増えてきたように思う。

事業計画の中でチケット収入の券売率見込みは、以前と変わってきているが、それを組み込んで計画を立てていけば、数が少なくなっても、総花的な事業の中に海外公演も可能になってくるし、助成金を獲得していけば可能になってくる。色々な事業をやっていく中で、採算のとれない事業というのもラインアップに組み込んでくる必要があると考えている。

→オーケストラとの協力公演の誘致を行っている。日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、この4つのオーケストラの定期公演は毎回かなり好評で、中には満員の公演もある。定期の会員の方々の年代層が60代中心であり、クラシックファンの方々は一定層いて、楽しみにされている。しかも、海外オーケストラよりも安い価格で質のよい音楽を聞ける環境がこのホールで用意できているということが公演を見ているとわかる。定期会員の人数も1,500~2,000弱であり、横浜市民が多いと思う。かなりの数の方々が会員になられているということはまだ期待できると思う。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、クラシック音楽を若い人に向けてアプローチする工夫をしていて、今年度は、アニメの声優の方を起用した公演で、若い人達、これまで見たことのないような客層の方々もお席にいらっしやった。

アニメでもクラシック音楽にかかわる新しいコンテンツができて、映画でも若いピアニストの方が実際に音を担当されて、そのピアニストが若い人から憧れの的になることもある。現場の演奏団体の方たちが、クラシック音楽を若い人に広める工夫をされているため、ホールとしてもその取組に協力しながら、若い層への拡大を協力団体と

一緒にやっつけていける余地はあると思っている。

「3 施設運営」「4 施設維持管理」について

- ・色々なことを着実に広げられていることがすばらしい。ツイッターやメディアを用いた取組に関しては、何が目標値となったのかわからないが、全てクリアしている。皆この演奏会をどう評価しているか等ツイッターで必ず見る。バレエ団はインスタグラムを多用しているなど客層に合ったツールを使っている。音楽専用ホールがいろんな人に届けるためにツイッターは有効である。色々なオーケストラがツイッター、フェイスブックを使っている。フェイスブックのほうが年齢層が高い等、ユーザーのプロファイリング等、お金をかけずに分析できるので、若手に考えてもらうとよい。
- ・レセプションルームの活用でパーティー付き等をやっていくことにも良いという考え方と、そこまでやる必要はないという考え方がある。横浜みなとみらいホールが首都圏や神奈川県の中でどのようなポジションを持つていくのか。首都圏には専用ホールも多目的なものもあり、役割分担が重要と思うが、レセプションルームを活用してのパーティー等、幾つかチャレンジしてみて、横浜みなとみらいホール版の、単なる客寄せのものではなくて、一味あるものを開発できると良い。

「収支」について

- ・29年度利用者数の約563,000人から30年度は約529,000人となり、減となった。大・小ホール共に減っており音楽練習室も減、リハーサル室とレセプションルームも半分程度になっている。29年度と比較をして、大ホールの数も減ったということは、コンサートの料金が高かったために入場数が減ってこういった状況になったのか。
→この利用者数は貸館利用のお客様とコンサート全てを含めたもの。28年度は537,937人のため、29年度が極端に増えている。
28～30年度の3年を比較しても、29年度が突出して多い。これは、神奈川県民ホールが改修で休館だったため、利用が非常に多かったことによる。本番公演が多いと必然的に入るお客様の数も多くなる。29年度との比較では確かに減だが、53万弱という数字は、この5～6年で見て漸減傾向にあるとは考えていない。利用者数を増泰必要はあるが、トータルの数字であるため、入場料の設定等の微妙な部分で影響を及ぼしているものではない、という認識が妥当と思っている。
- ・収支では、29年度、30年度がマイナスだった。30年度も1,200万ぐらい赤字ということだった。助成金がなかった状況での予算の立て方だが、2年間連続でこれだけ赤字を出しているとなると、普通の事業でも前年の反省がなかったのではないかと思える。チケットの収入減というのが一番の原因だったのか。
→助成金とチケットの収入減、ほぼ同じ規模でその2つの原因が占めている。それぞれ1,000万円台となっている。
→(委)それは情報収集ができれば回避できたと考えてよろしいか。
→助成金は、その部分が決定的に欠けていたところであり、今後も、このような状況は脱すべく対策を打っている。
事業収入に関しては、開館記念年のため大型の海外オーケストラを企画したが、思うように収入を伸ばせなかった点は見通しの甘さと言わざるを得ない。しかし、全くそのような事業を行わないということも、横浜みなとみらいホールのステータスとしてショックが大きいので、どういう形で組み込んでいって収支のバランスをとっていくかということを考えながらやっていきたい。

・ どうやって人から理解してもらおうかという時に、自分たちのストーリーがどう見せられるかを考えたほうがいい。今はPDCAではなくロジックモデルであり、そのロジックモデルをつくる時に自分たちの自己分析がどれだけできているか、その中からやるべきことがどう見出せているかということ、それが分析できているかどうかというのがわかる。その見せ方と、その前の自己分析が、あらゆることにおいて鍵になるのだろうと思う。そういうことを行政機関も求めるようになってきている時代なので、意識的に念頭に置いていただけて進めていただければいろんなことが進んでいくと思う。頑張っていたきたい。

・ ファンドレイジングの問題は、短期的には客観的に分析しつつ、今後どのように変化するかも踏まえつつ、しかし、自分たちの方針にある程度合致できるもの、特に横浜では海外との関係として多文化共生的な要素は重要であり、そういう側面に関してきちんと前向きに考えていくべきではないか。

観光・インバウンド的な要素に関して、自分たちの方針とマッチをして、見合うものに取り組んでいく考え方が必要ではという気がする。

企業協賛がもっと獲得できてもいいのではないか。都市部にある施設として、横浜のこの地域にある施設として、企業協賛を真剣に考えて、獲得するための努力をしていく必要がある。

事業に関して、20周年で大型事業をやって事業収入が入らなかったというのは、根本的に何か考え直す必要があると思う。ファンドレイジングに関しては、公的なものと民間のものに関してもそれぞれ分けて作戦を考えていくことが必要である。

「組織」について

・ 評価表記載の通り。

「総括」について

・ 応援団になることが委員の役目でもあると思う。頑張っていたきたい。
・ 企画、様々な普及活動等、良い活動をしていると思う。立地もよく、もう少し横浜みなとみらいホールが首都圏の中でリーダーシップをとっていいのではないか。

その一つのテーマとして、青少年層やクラシックファンを豊かにしていくための工夫をオーケストラ、協力団体と組んだり、あるいは他のホールと連携したりしながら進めていく。

3つぐらいのパターンがある。1点目として、横浜市の中で言うならば、最もトップにあるフラッグシップの館として他の館を応援するという立場でリーダーシップをとってほしいということ。

2点目に、首都圏の他のホール、神奈川県、川崎市、東京都のものといった近隣地域の専門ホールとの間の連絡網を確立して、共通する課題として、クラシック音楽ファンをどのような形で育成していくのかについて何かプログラムをつくってほしい。

3点目は、地域の中で、特に横浜が抱えている課題などを含めて、NPO等とのネットワーク、一種のネットワークのハブ的な機能をぜひ持つようにしていただきたい。財団が運営しているからそれができると思う。市との政策協働型の指定管理でもあるので、財団、ホールだけではできない場合には市も巻き込んでやっていくことも含めて、作戦を立てられると思うので、ぜひ動いてほしい。

大規模改修の休館時、アウトリーチは色々やってほしいが、数が少なくても将来の幹部職員を育成するために海外に派遣してほしい。クラシック離れは日本だけではなく

アメリカなどは典型的に起こっている。あるいはホールがどのような形で地域と連携しているのかを含めて、特に最近、ドイツのホール、オーケストラがおもしろいことをやっているの、そういう部分もぜひ見てもらって、研究を積み重ねてほしい。

- ・消費増税によって色々な影響が出てきている。ホールには様々な方がいらっしやっている。お金を出して楽しみ優雅な気持ちになることも大切だが、それよりも食生活が大事という人もいらっしやるのが実態。そのような方達を巻き込んで今後どのように展開するかは課題になると思うので、そのことを踏まえて事業を展開して欲しい。
- ・東京のすぐそばにあって「浜には浜の意地がある」というのは横浜の良さ。現在苦労している中、長期の休館期間となる。あつという間に休館が終わってしまうので、計画を今から立てていただきたい。

サントリーホールでも、いわゆるファンクラブモデルが始まっている。ポップスのコンサートのように、良い席をとるためにはファンクラブの熱心な会員であり、お金を払わなければならない仕組みを作っている。これは少しずつうまくいき始めていて、中小音楽事務所などその手法をとり始めている。

それには学ぶべき点もあるが、フラッグシップ館としてリーダーシップを発揮するところで、横浜がこんなことをやったら若い人達がたくさん来たというようなことができないか。今、クラシック音楽は至るところで鳴っており、モーツァルトのレクイエム、バルトークのルーマニア民族舞曲等、まるでライトモチーフのようにクラシック音楽が使われていて、しかも若い人たちは結構それで盛り上がっている。アニメや映画で入ってきた様々な音楽を生で聴いて、もっと「すごい」と思ってもらえるようなモデルをつくる2年間の休館にできないか。

横浜みなとみらいホールは色々なことをやってきて、色々な人を育てているので、そこから刈り取って「横浜みなとみらいホールの客層は若い世代ばかりだ」と言えるようなとば口をつかめないものか。考える時間、組み立てる時間があるので、興行モデルではなく何かできないか。絶対何かできると思う。

→休館中は、休館中でなければできないことも突き進めてやっていくべきと思っている。自分たちの館がなく、人に頼る中でネットワークを組んでいき、そこからまたおもしろいことが生まれていくような期間にしたい。

また、クラシックの将来について委員の皆様から具体的なヒントもいただいた。新しい価値観を提示できるかどうかということだと思う。クラシックの良いところは、歴史があるので、こだわりどころが満載であること。今、世の中は色々な情報を得られて、皆が知っている、聞いたことがある中で、新しいものを提示できるのか。あるいは今まで専門家、音楽プロデューサーでなければ経験できないようなことを疑似的に体験してもらい、実はこんなにも奥の深いものだという事に気がつくチャンスがあれば、潜在的にそこに興味を持ち得る人を掘り起こし、こ興味を持って見せていけるかというところは考えていけるのではないかな。引き続き御教示いただきながら頑張っていきたい。

まとめ

本日の委員会で確認した内容を踏まえ、各委員は評価シートを改めて清書し、事務局で調整の上、委員会の最終評価内容としてまとめることとする。